

侵入思考に対する抑制の意図及び確信度と思考コントロール方略との関連

C118018 濱崎萌果

本研究は、場面想定法を用いて、侵入思考の増加を規定する要因として考えられる抑制意図の強さ、及び抑制確信度の高さと、侵入思考に対する5つのコントロール方略の関連について検討を行った。その結果、抑制意図が強くなるほど、気晴らし方略が行われている一方で、侵入思考の体験を他者と共有したり相談したりする社会的コントロール方略は行われなくなる傾向が認められた。また、抑制確信度が低くなるほど、侵入思考の意味を見直す再評価方略と、自分を責めたり罰したりする罰方略が行われている傾向が認められた。とくに、罰方略と抑制確信度との相関結果から、様々な侵入思考との関連が示されている罰方略が用いられる背景として、侵入思考を上手く抑制することができないと感じるほど侵入思考の生起頻度が増加し、その増加の原因を自己に帰属させることによって、自己を責めたり罰したりしてしまうという過程が推測された。

「終の看取り」にもたらす心理・社会的要因についての考察

C118031 松山浩太郎

本研究は、家族や親戚など看取る人と看取られる高齢者(当事者)の間で想いを伝え合えるのに必要な心理・社会的要因について考察することを目的とした。また、当事者やその周囲の人が「天へと旅立つ」ことが、死生観や生、命に対する価値観の形成にどう関与しているのかを検討することを目的とした。本調査は大学生3名を対象にインタビューおよび質問紙調査を行った。ダイアログはテキストマイニングを用いて分析した。その結果、生前の関わりは参加者自身の人生における基盤を成していることに加え、死別後には心境や想いがその基盤と結びつき、生命観や人生観への認識が進んでいくことが読みとれた。また、人生基盤のあり方は、親しい間柄の人とのコミュニケーションの活性化が一要因として関連していることが読み取れた。これらのことから「人生会議」においては、情緒的なプロセスが伴うことに加え、出会いから別れに至るまで連続的に続くものであり、終末期以降のコミュニケーションにおいても様々な変化をもたらすことが読み取れた。

サッカーにおけるホームアドバンテージの観客の有無による影響

ー欧州サッカーリーグの無観客試合をもとにー

C118149 田口道雄

スポーツの世界では、ホームチームの方がアウェイチームよりも有利だとするホームアドバンテージが指摘されている。ホームアドバンテージには習熟因子、移動因子、ルール因子、観客因子という要因が挙げられている。観客因子において、スポーツは観客がいることがほとんどであるため、観客の有無による影響を分析した研究は少ない。そこで本研究では 2020 年の新型コロナウイルスのパンデミックによって多数の試合を無観客で行ったサッカーの 3 リーグを対象に分析を行い、ホームアドバンテージの観客の有無による影響を検討することを目的とした。観客の有無およびホームアウェイを独立変数とした 2 要因分散分析の結果、リーグごとに違いはあったものの、ゴール数や勝ち点数といった選手のパフォーマンスと審判の判定による提示カード数において観客の有無やチーム条件に関わらないホームアドバンテージ、あるいは観客の有無によるホームアドバンテージがみられた。